

オフレコの話(時効のはなし)(その1)

de JAIRIZ

「人生とは」とか難しいこと事を書くのは、中身のない自分にとっては非常にむずかしいことです。そこで、「体験談」なら良いのではなかろうかということで、ずっと前のことを、もう時効であろうという様な事を、記憶の糸を手繰り寄せつつ書いてみたいと思います。記憶力が BF な当局のことですから、曖昧模糊としたところも多々出てくると思いますがその点は御容赦の程をお願いしたいと思います。

まずは、私の場合、趣味がこうじて某無線会社に入社することになった訳ですが、入社するまでの物語りです。学校から、その会社に応募したのは3人で電気系に2人、機械系に1人でしたが、入社試験で内定したのは機械系の1人と自分でした。入社試験の時は受けに来たほかの人たちもほとんどがハムをやっている人間で旧知の友人のように和気あいの雰囲気でした。我らは団塊の世代、入学も入社も大変な時代だったと思うが殺伐とはしていなかったように思う。その他校の友人(?)達と試験の答え合わせをしたところ間違ったところが多く、アアこれでは落ちたな、と思っていたのでした。ところが落ちてしまったのは同じハム仲間自分より成績優秀の友人だった。自分は試験結果も BF だったので全員合格か落ちるのは自分であろうと思っていました。

その頃の先生の権威は絶大で、自分が入社試験を受けたい所より、まずは先生が受けさせたい所を受験しないと自分が希望したところは受けられないという事になっていました。私はモーターや発電機を製造するような会社を希望していたが、先生からはまずはこの無線会社を受けよ、ということになった。趣味は趣味、仕事は仕事と考えていたが、まずは先生お勧めの無線会社を受けたので、次は本命の電機会社を受けさせて欲しいと頼んだが、先生は、「もう内定したのだからほかの会社は受けてはならん」、との理由で自分の希望ははねつけられてしまったのでした。

結局は、先生がイチオシの所に決まった。自分が無線会社に受かったのは先生の「内申書」の御利益のおかげであろうと今でも思っています。

後々、考えてみると、学校にあったクラブ局から、先輩が自作したキャリアコントロールの A3 送信機と受信機 9R42J(春日無線:現ケンウッド)を駆使して、それこそ日夜アマチュア無線にどっぷり浸かっている毎日でした。常に学校からの帰り時刻は、夜間部の生徒と同じだった。自分としては、これは『趣味だ!』との認識だったが、周りから見ればそんなに好きならこれを仕事にした方が良いのではと思ったのでしょうか。

さて、入社しての配属先は本社工場と思っていたが、そうではなく、主に船舶関連の通信機器の装備をメインとした品川区にある町工場の様な工場であった。配属後再度、希望職種を決める面接があった。恐れもなく、「設計職」を希望したが、面接した工場長から「設計をやるには現場を知らなければ良い設計はできない。」と言われ、なる程と思いました。結局、自分の希望は通らず現場部隊(装備工事部)に決定した。やっていくうちに上司の判断は間違っていなかったことが分かってきたのです。

その部門は、V/UHF 帯の無線設備、ハンディ機(携帯機)・基地局の修理を扱うのが主な業務の部門であった。工場内での修理作業をメインにしつつ、外国航路を走る船舶、タクシー会社、放送局、警備会社等々の現場修理や装備工事などの出張業務もある内容であった。修理しつつ技術研鑽を積んで現場での対応をする、ということは希望していた設計業務より自分の性分に合っている、と考えるようになってきた。

技術半分+人付き合い半分というような状況なのが、自分に合っている様であったように思う。

初めの頃は東京湾に停泊する外洋船の VHF 無線設備の修理も担当することがあった。栈橋からハシケに載って湾上に停泊する船に渡るのである。船舶は接岸していると接岸料というものを取られるので、荷役作業が終わると直ぐに離れてしまう。このような場合、船上に滞在する時間が制約され、ある時はすぐ就航するので次の港まで乗ってくれという場合もあったが、幸い修理がギリギリ終了して別の港に連れていかれることはなかった。これら船上での作業は、英語が苦手な自分は嫌で仕方がなかった。

しかし、修理が終わると、報告書には無線局長のサインが必要で、これが無いと修理費の請求ができないシステムになっていた。何が何でもサインが必要で、片言の英語を駆使した訳です。相手も中々の強者で、局長は船に居ないとか言ってサインしたがる場合もある。ケンカ腰で、最後は日本語で怒鳴ったり

…。相手も最初は英語、そのうち中国語だか韓国語だか自国語になってくる。すったもんだの拳句、最後はサインをもらって下船してくる訳です。Hihi 船に上がる時は、「自分は無線技術者である」といって入るものだから、相手は『相当な技術者』と思うらしい。兎も角、「エンジニア」と言うと格が高いらしかった。無線機の修理が終わると、これも見てくれないか等とカセットデッキなどを持ち出してきて修理を頼まれることもあった。彼らの船上生活には大事なものらしく断っても懇願されるので、分解して回路の抵抗を調整したりして何とかするという、いい加減な処置ではあった。修理すると大いに喜んでくれるという事もあった。

今ではこんな事をしていたら会社から大目玉を食らうことになるでしょうが、のんびりした良い時代でありました。

修理に出るときの必携品は、信号発生器(SG)、電力計(ダミー計)、テスタ、工具一式であった。当時は、交通手段は電車がほとんどで、作業服でSGを肩に掛け、工具や小計器を大バッグに入れ、手持ちするような恰好で出かけていた。SGは箱型で7~8kg、大バッグ10kg以上はあったように思います。…今ではそんな馬力は無いですね。

ある基地局の修理に行った時の事。修理内容は「受信も送信もできない」というもので、これは大修理になるか!と心配しながら現地到着した。担当者も直るかどうか心配顔をしていた。こういう症状の時は、まずは電源系から当たれ!というのが鉄則、電源が正常に供給されているのか確認するとアレアレ電源プラグが抜けているではないか。プラグを接続して、送受信の性能チェックをすると勿論、異常無しであった。担当者に報告すると、そのまま報告書を書いてもらっては困るので、どこか故障していたことにして欲しいと依頼あり。「お客様」の要望は天の声、断ることはできません。「電源部が故障」していたとの修理報告書を作り、無事にサインをもらって意気揚々と帰社したこともありました。

そして、会社では半田ゴテを持ち無線機を修理し、家(寮)に帰っても又、アマチュア無線の生活。ハムの免許を持つ多くの同僚たちは、『家に帰ってからもアマチュア無線をやる気にならない』とか言っているのを尻目に、仕事だか趣味だか分からなくなる様な日々が続くことになったのです。 (つづく)